

えびの市教育研究センター

1 研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 - 1

(1) 研究主題設定の理由

(2) 研究の全体像

2 研究用語の整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 - 2

(1) 研究主題について

(2) 副題について

3 研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 - 3

(1) 令和元年度

(2) 令和2年度

(3) 令和3年度

4 研究の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 - 10

(1) ロイロノート授業活用の変遷

(2) 研究の成果と課題

5 参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 - 10

○ 研究同人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 - 10

主体的に学び、自ら解決できる児童生徒の育成
～小中一貫と他との幅広い関わりを生かした取組を通して～

えびの市教育研究センター

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

今回の学習指導要領改訂において、「主体的・対話的で深い学び」が重要視され、児童生徒一人一人が学びを獲得していくような授業改善が求められるようになった。宮崎県においては、令和元年に教育振興基本計画が策定され、15の施策と3つの重点取組が掲げられた。これを受け県内各教育委員会でも教育基本方針を定め、各学校での教育実践を行ってきた。

えびの市においては、ふるさと「えびの」に誇りをもち、未来を切り拓く「人財」の育成のため「30人学級事業」や「幼保・小・中・高一貫教育」など、一貫教育の推進を含めた様々な事業に取り組んできており、「一人一人が輝く、特色ある学校の創造」のために「学力の向上」「一貫教育」「ふるさと教育・キャリア教育」に重点を置いた教育実践が続けられている。

これを受け、えびの市研究センターでは、えびの市教育委員会の指導のもと、各校から集まる研究員とともに「学力」に関する意識を共有し学びに生かす取組、えびの市にある中学校区を核とした一貫教育推進のための取組、児童生徒のキャリア形成のための取組について研究を深めることとした。

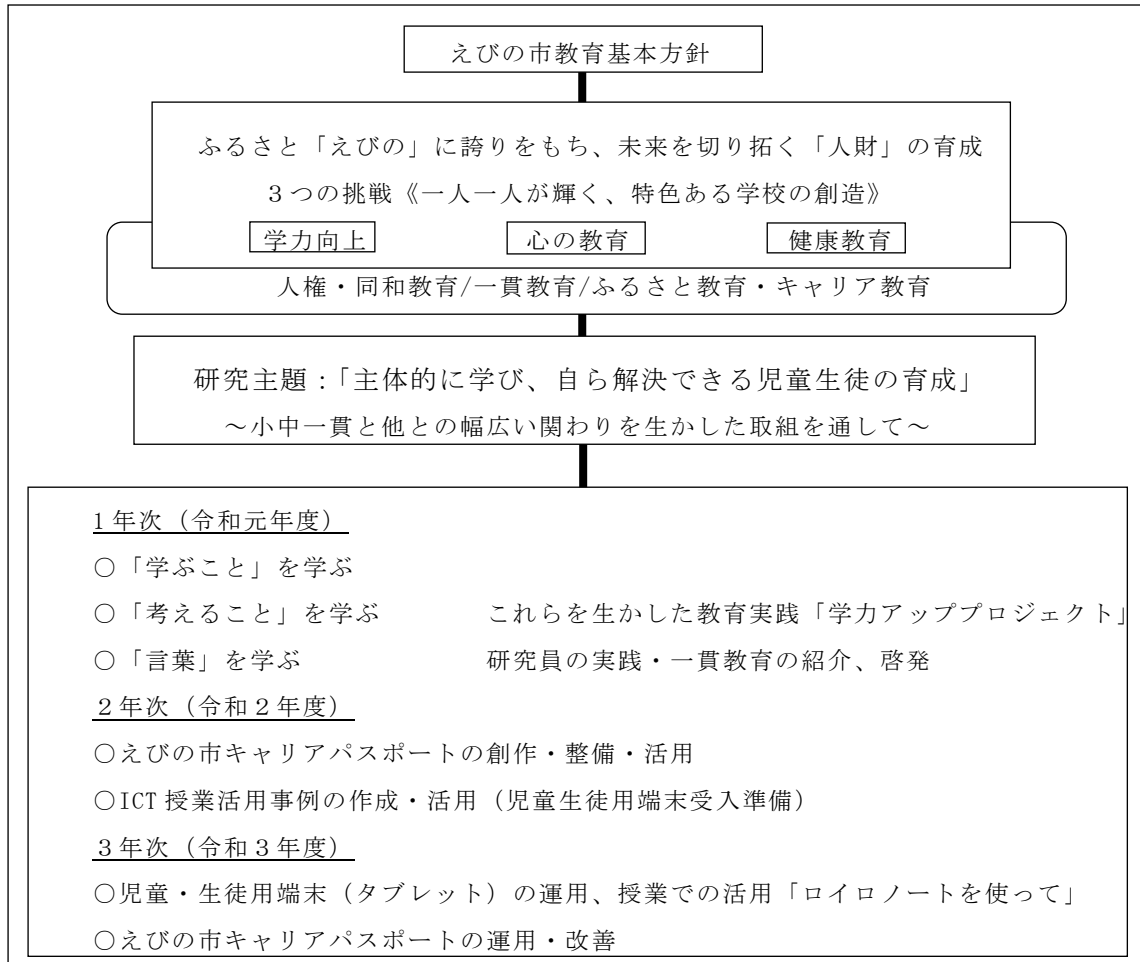
そこで、研究主題を「主体的に学び、自ら解決できる児童生徒の育成」、副題を「小中一貫と他との幅広い関わりを生かした取組を通して」とし、3か年計画で研究を行うこととした。

(2) 研究の全体像

この研究は、3年計画であったが、令和元年度末から拡大した新型コロナウイルス感染症による休校措置、明けて令和2年度～3年度の感染予防措置等による影響を大きく受け、研究計画の変更を余儀なくされた。さらに、令和2年度以降GIGAスクール構想の実現に伴い、児童生徒用端末（タブレット）導入後の授業活用は待ったなしの緊急課題となった。

本研究にあたる研究組織は、えびの市教育研究センターを中核に、市内各小・中学校に委嘱された研究員で進めることとし、月1回の全体会議や臨時の会議、班別の会議等で構成された。そこでは、市内全体に関わる内容や、統一を必要とする内容を協議したり、小中一貫教育の状況を把握し啓発したりする場とした。

今回の研究報告は、3年間の研究実践をまとめ、この実践から導いた今後の教育的課題を明らかにしようとしたものである。以下、研究の全体構想（図1）を示す。



【図1 えびの市教育研究センター（令和元年度～令和3年度）研究全体構想図】

2 研究用語の整理

(1) 研究主題について

- 「主体的に学ぶ」とは（新学習指導要領より）

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげていく学び方。

- 「自ら解決できる」とは（井上一郎氏「元文部科学省教科調査官」監修）

自主的な学習力を身に付け、自分で解決していく姿のことを指す。

自主的な学習力とは次の3つの要素から構成される。

- ・ 「学ぶこと」を学ぶ・・・自主的学習力

各教科等に応じて自ら課題を設定し解決する方法と、日常的な学習習慣を身に付ける。

- ・ 「考えること」を学ぶ・・・自立的思考力

結論や解決を得るために自立して追究し判断する思考と、興味をもって思考することを身に付ける。

- ・ 「言葉」を学ぶ・・・自己読解力と自己表現力

多様な表現様式の言語表現とそれらのプロセスに応じ、自分の独自性において読解したり表現したりする個別的・個性的な言語能力を身に付ける。

(2) 副題について

- 「小中一貫」とは
 - ・中学校区内のつながり「指導のつながり」「共同実践」「目標の共有」を指す。
(縦糸のつながり)
- 「他との幅広い関わり」とは
 - ・他校、他校区校はもちろん、他の自治体の学校・企業など他の集団と関わる機会を設定し、そこでの学びを日常の学びへと生かすことを指す。
(横糸のつながり)




3 研究の実際

(1) 令和元年度

① 学力アッププロジェクトの実践

えびの市立真幸中学校区にて、元文部科学省教科調査官の井上一郎氏の指導の下、真幸中・真幸小・岡元小の3校での授業・研究を行った。井上氏の指導内容として、「教師主導型から児童生徒主導型へ」という授業改善の方向性が示された。その背景として、「学力」の捉え方が世界的に大きく変化してきていることが挙げられた。特に、各教科の知識としての学力だけではなく、思考力や汎用的な能力が求められていることを大きな要因とした。授業中、教師の喋り過ぎが児童生徒の主体性を奪っていることから、もっと子どもたちに委ね、教師は見守るスタンスをもつことの必要性を繰り返し説かれた。また、時間内の記述の徹底と、一人の解ではなく複数解の中からグループの納得解を作る意識の醸成や討論力の指導等を行うようにとの助言をいただいた。この取組を市内の全学校に広げ、「学力」を向上させようとする仕組みを学力アッププロジェクトと呼び、実施した。

ア 真幸中学校区：授業の概要

真幸中学校 3年 教科：数学 指導者：主幹教諭 今屋敷 浩司	生徒のグループ活動や司会進行での授業を実践。 司会の生徒を中心に学習を深める。 グループ解の相違点に目を向ける。	
真幸小学校 5年 教科：算数 指導者：教諭 本田 昭寿	「ワールドカフェ」形式の学び合い活動を実践。 相互の意見を聞き合う。 伝え合う姿が見られる。	
岡元小学校 5・6年 教科：算数（複式） 指導者：教諭 押川 博重	児童中心でガイド学習の進行・まとめを実践。 少人数を生かした表現の場の工夫。 まとめでのグループ解を探す。	

【写真1 グループ話し合い活動】

【写真2 真幸小「ワールドカフェ」形式の学び】

【写真3 ガイド学習のまとめ】

② センター研究員の取組

令和元年度は、主体的に学び、自ら解決できる児童生徒の育成に向け、各研究員が「学び」の3つの視点に沿った研究を進めていった。

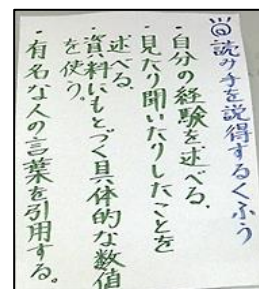
ア 「学ぶこと」を学ぶ

㊦ 飯野小学校 高須教諭

○ ラーニングスキル

話し方・聞き方に関する指導を行った。
相手にしっかりと意見を伝えるために、きまり（写真4）を掲げ日常指導を行った。
また、聞く力を向上させるために、日常的な実践にも取り組んだ。

右に示した取組（資料1）を行うことで、児童の「聞く」ことへの意識が高まるとともに、授業中、教師の話や友達の話を中心して聞く姿が見られるようになった。



【写真4 教室掲示】

- ～ 聞いているか確認する ～
- ・ 教師が話した後に、「今からすることが分かる人？」と尋ね挙手で確認する。
 - ・ 今から発表することを発表させて、ペアで確認する。
 - ・ 児童が発表した意見を板書し、「これは誰が発表したかな？」と尋ねる。

【資料1 聞いているか確認する取組】

㊧ 飯野中学校 川島教諭（国語）

○ 生徒自身が行う学習課題の設定

自分たちで学習課題を考える活動を展開した。授業中の手立てとして4つを行った。（資料2）

- 1：全文を通読して、疑問に思うことや、気になることを探す。
- 2：1で見つけたことを基にして、個人の学習課題を決める。
- 3：各班3人の小グループをつくり、それぞれの課題を基に、班の課題を決める。
- 4：それぞれの班で出した結論を発表し、全体で共有する。

【資料2 学習課題設定の手立て】

留意点として、教師は生徒に求められるまで指導・助言をせず、思考の過程を捉えることや、うまくいかない場合に例を示し参考にさせることにした。

イ 「考えること」を学ぶ

㊦ 加久藤中学校 門田教諭（理科）

○ 思考力を高める工夫

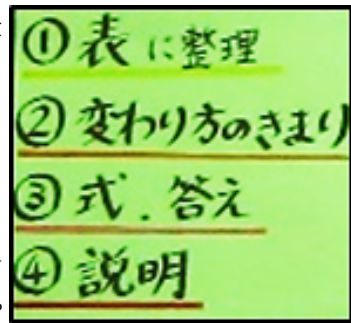
生徒の活発な対話を通して思考を練り上げる補助教具「まなボード」を活用した。（写真5）

これにより、根拠（理由）を示して考察や課題解決を行う習慣を身に付けさせることをねらいとした。



【写真5 「まなボード」活用の様子】

各個人で考えた根拠を示した考察を持ち帰り、班全体で共有して互いの思考を高めることで、考えを共有させることができた。



【資料3 考え方の掲示資料】

④ 加久藤小学校 上森教諭

○ 思考させるための手段

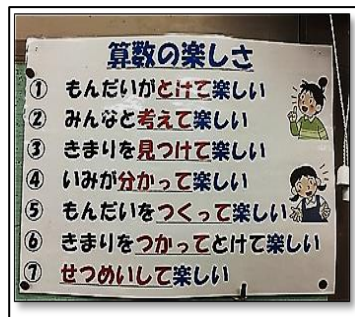
算数科において、思考の手段を明確にし、スモールステップ化し掲示することで、どの児童にも思考しやすいようにした。(資料3)

ウ 「言葉」を学ぶ

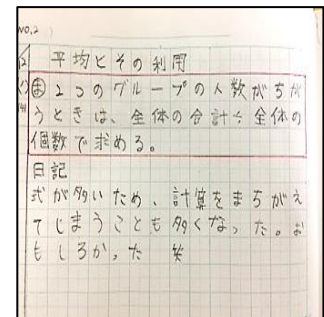
⑤ 上江小学校 永田教諭

○ 算数日記の実施

分かったことや感想などを伝え合う活動を行うために、授業の終わりに算数日記を書かせた。教室に視点を掲示し(資料4)ノートへ記入させ、(写真6)時間があるときには、発表し、感想を伝え合うことで、主体的・対話的な学びにつなげた。



【資料4 算数日記を書く視点】



【写真6 算数日記の実際】

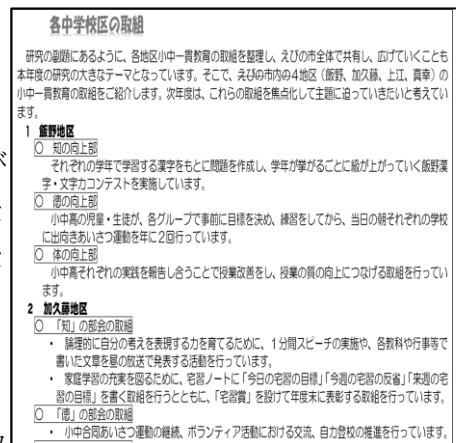
④ 加久藤小学校 上森教諭

○ ことわざ調べ

語彙力を増やすための手段の1つとして、家庭学習で毎日1つことわざを調べさせる活動を継続して行った。

③ 一貫教育

小中一貫教育は、各中学校区毎に進められた。えびの市教育研究センターでは、これらの取組を取りまとめ、市全体で共有した。内容をまとめたものは資料として全職員に配付した。(資料5)



【資料5 各中学校区の取組配付資料】

ア 遠隔授業

副題に掲げた、他との幅広い関わりを生かした取組を進める中で、遠隔授業を通し、他校との交わりの中で刺激を受けることにより、自らの学びを見直し、日常の学習に生かそうとした。

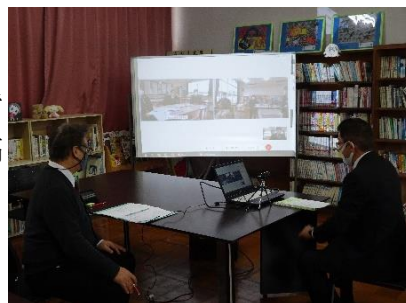
令和元年度は、学力アッププロジェクトの関連として、真幸中校区内で実施した。真幸小と岡元小を回線つなぎ、少人数解消や、多様な意見に触れさせることを目的に授業を行った。(写真7)



【写真7 真幸・岡元小間のリモート学習】

イ 職員研修

職員研修は、NTT のサポートを受け遠隔授業ツール Cisco を利用し、小学校同士、さらに小中同士での活用を図った。実際の研修では、研究授業を遠隔で視聴したり、リモート会議で活用したりすることができた。(写真 8)



【写真 8 リモート会議】

(2) 令和 2 年度

① えびの市キャリアパスポート

これまでえびの市では「ふるさと教育・キャリア教育」を進めてきた。各校では、カリキュラムが整備されてきたが、学習記録の統一は無かった。次年度、キャリアパスポート完全実施の時期に備え、早急に市全体での対応が求められた。そこで小中一貫の見地や高等学校まで続く様式を作成するため、研究センターが中心となり、えびの市独自で各校種共通の様式を模索した。そのために、仮作成から研究員の先行実践による問題点の追求、内容の精選、広報などの環境整備、実施というロードマップを考え実施した。えびの市キャリアパスポートはこのようにして生み出された。(資料 6)

今後、実際活用し現場の声を聞きながら、更に問題点を探り改良を加えていく必要がある。



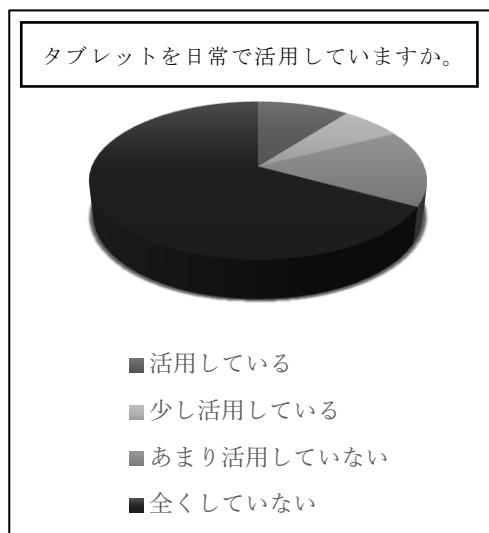
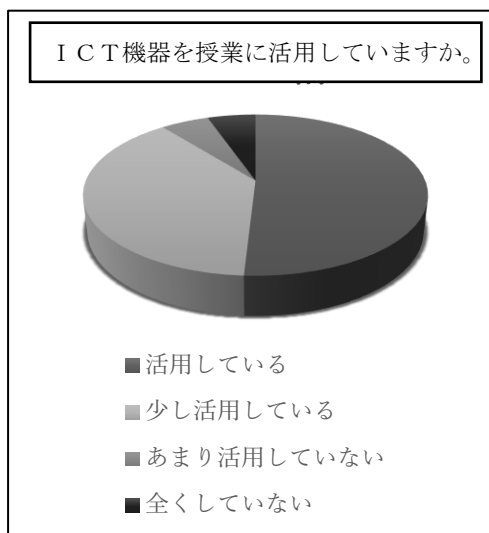
【資料 6 キャリアパスポート小 1】

② タブレットを用いた授業活用集の作成

GIGA スクール構想による 1 人 1 台児童生徒用端末 (タブレット) の整備が計画される中、研究センターでは、ICT 活用の現状や、タブレットに対する職員の状況について調査し、職員のリテラシー向上のための方策を練ることとした。

ア 実態調査

えびの市内教職員を対象に、アンケート調査を実施した。資料 7 によると ICT 機器を活用する意識は高く、授業でよく活用する状況が分かった。具体的には、写真機能を使って記録を取ったり、インターネットを使って調べ学習を行ったりするものが多く報告された。また、スキャンで画像を取り込み、授業で活用したり、大型 TV を使ってデジタル教科書を活用したりすることは、日常的に行われており、ICT 活用の状況は良好と考えられた。これは、職員が活用できるパソコンや、学級でインターネットに接続できる環境が整備されていることが、大きく影響していると考えられた。



【資料7 市内ICT活用アンケート】 【資料8 市内タブレット経験アンケート】

しかし、資料8によると、職員は、タブレットを活用する経験が乏しく、タブレット活用のスキルが無い状況や、タブレットを用いた授業のイメージがわからないことが予想された。

イ えびの市 ICT 活用事例集の作成

令和3年度に導入される児童生徒用端末（タブレット）の授業場面での活用例が分かる授業活用集の作成・配付を行った。活用場面の分類は、文部科学省が示した「学びのイノベーション事業実践報告書」に示された学習場面分類表（資料9）に従い、タブレットを使用する授業場面を分類しA～Eに分け具体例を示し、更にICT活用事例集（資料10）を作成し市内の先生方に配付した。

分類	授業形態	細分類
A	一斉学習	1. 教材の提示
B	個別学習	1. 個に応じる学習 2. 調査活動 3. 思考を深める学習 4. 表現や製作
C	協働学習	1. 発表や話し合い 2. 意見整理 3. 協働製作
D	遠隔学習	
E	プログラミング学習	

【資料9 学習場面分類表】

B3 思考を深める学習

個別学習の授業において、思考を深める学習で活用できます。
《タブレット（ロイコノート）の活用》
ロイコノートの活用により、タブレット上の資料を動かしたり、直線文字や図・線を記入したりして活用できます。また、友達とのデータと比較したり分類したりすることで自分の考えを深める学習に活用できます。

学習場面	1年生	図画工作科	実践者 横山 拓貴
アプリ・機能	タブレット端末に標準搭載されている録画機能・ロイコノート		
写真			
学びの目的	◎気に入った作品について感じたことや考えたことを記録し、写真と合わせて学級で共有することで、見方や感じ方を広げる。		
子供の様子	・友達の作品を見ながら気に入ったところを見付けて記録した後、ロイコノートの提出機能を使って共有することで、友達どの作品を気に入って、どのようなことを感じたのかを交流することができた。友達の活動を知り、付け足したり、書き直したりする姿も見られた。		
効果	◎ロイコノートの付箋を気に入った作品の気に入った部分に貼り付けることで、感想を直感的に記録できる。提出箱の共有機能を使うことで、友達の考えたことを知ることができる。		

【資料10 えびの市 ICT 活用事例集】

(3) 令和3年度

① ロイロノート授業実践報告集

児童生徒用端末（タブレット）が1人1台配備され、本年度より学校現場で本格的に活用することが求められた。市内教職員へのアンケート（7月実施）によると、多くの教職員がロイロノートを活用し始めているのが分かった。また、ロイロノートを活用していない方々の理由として、「研修を受けていない」や「どこで活用して良いか分からない」というものが多く見られた。

そこで、研究センターでは、研究員でロイロノートに未経験の研究員と既にある程度のスキルをもつ研究員に区分して、どのようにすれば自分のスキルを上げたり、児童生徒のスキルを上げたりすることができるかを実践研究することにした。

まず、自分のスキルを上げる研修を設定した。これは、ロイロノートのホームページ上で申し込める研修に参加するものであった。実際の研修の日には、研究員以外の職員も自主的に参加されていた学校も報告された。その後、各学級で児童生徒への説明や慣熟操作を行った。特に問題とされたのが、ローマ字によるキーボード打込みであったが、画面に直接手書きができたので対応することができた。

授業研究ができる状況になった研究員は、相互見学の形で研究授業を行った。そして、この経験をまとめることで、ロイロノートを活用した授業の具体的マニュアルができた。スキルの高い研究員は、高いスキルで行う授業研究を行った。

「未経験の先生が、自分の学級で、どのように児童生徒の活用スキルを上げ、授業活用まで至り授業公開ができたのか」や「スキルの高い先生がどのような授業を行ったのか」をまとめたもの、それが、ロイロノート授業実践報告である。（資料11）この報告集を市内教職員に配付することで、授業活用への意識や、ロイロノートのスキルを高めようとする意欲の高揚を図った。児童生徒も、スキルの高まりと共に「自分の意見が先生に届く」「楽しい」「普段発表しない人の意見が分かる」「アンケートで瞬時に結果が分かる」「いつもの授業とちがう」「やる気が出る」「グループで意見をまとめられる」「プレゼンで自分の考えを出せて友だちの考えも分かる」等の意見が数多く寄せられた。

授業では、明らかに自分が主体で参加する意欲が感じられており、友達と意見を共有し自分の考えをまとめたり、自ら解決しようとしたりする姿が、見られるようになっていた。

単元名 算数科「三角形と四角形」もようづくり	学校名 飯野小学校 指導者 松田 一樹						
実践の概要 これまでロイロノートを使って、基本的な写真や動画の撮影を行ってきた。特に写真の場合は原簿書き込むこともできるので、見頃は気づいたことを写真に書き、教師に提出する活動を行ってきた。今回はその写真機能を使用して、色紙を並べてできた模様を撮影し、提出させることにより、全体で比較をしていくようにする。							
ロイロノート導入のメリット <ul style="list-style-type: none"> 模様の手本を1つずつ送信することで、1つの作業に集中してタブレットを見ながら活動を行うことができる。 写真を保存することで記録が残るので、自分で作成した模様を比較しながら新しい模様を作り出すことができる。 児童全員の実績を集約することができるため、比較をしやすくなる。 							
授業実践の目標 <ul style="list-style-type: none"> 写真に撮影し、記録を残していくことにより自分や他者の考えを比較することができるようになる。 							
授業実践の場面 <table border="1"> <thead> <tr> <th>授業内容</th> <th>ロイロノート活用場面</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 学習の見直しをもつ 色紙をならべて、いるものをもうよを作ろう</td> <td>○ 教師から送信された写真を見て、本時の活動への意欲をもたせる。 </td> </tr> <tr> <td>2 送付された手本を見て、同じ模様を作る</td> <td>○ 教師から送信された手本をタブレットで見ながら、模様の作り方を確認する。  ○ 斉配付を活用し、模様について気づいたことを書き込み、模様の作り方を確認する。 </td> </tr> </tbody> </table>		授業内容	ロイロノート活用場面	1 学習の見直しをもつ 色紙をならべて、いるものをもうよを作ろう	○ 教師から送信された写真を見て、本時の活動への意欲をもたせる。 	2 送付された手本を見て、同じ模様を作る	○ 教師から送信された手本をタブレットで見ながら、模様の作り方を確認する。  ○ 斉配付を活用し、模様について気づいたことを書き込み、模様の作り方を確認する。 
授業内容	ロイロノート活用場面						
1 学習の見直しをもつ 色紙をならべて、いるものをもうよを作ろう	○ 教師から送信された写真を見て、本時の活動への意欲をもたせる。 						
2 送付された手本を見て、同じ模様を作る	○ 教師から送信された手本をタブレットで見ながら、模様の作り方を確認する。  ○ 斉配付を活用し、模様について気づいたことを書き込み、模様の作り方を確認する。 						

【資料11 ロイロノート授業実践報告集より】

② キャリアパスポートの活用

令和2年度に作成し、本年度完全実施となったキャリアパスポートであった。本年度始めに、確認事項として、次の内容を示し一斉に実施した。

- 各学年3枚作成を基本とする。内容の変更がある場合は各校で対応する。
- ファイルの内容を増やしたいときには、学級担任の裁量で行う。
- 現在の学年から高等学校まで使うことを目的とする。

具体的には、児童生徒用キャリアパスポート用紙（資料12）と、教師が活用するためのマニュアルを示した用紙（資料13）を添え、各担任が活用できるようにした。これにより、記入の手順や記入内容の統一を図ることができた。

指導に活用

【資料12 児童生徒用キャリアパスポート】 【資料13 教師指導用キャリアパスポート】

このキャリアパスポートは、各校で活用を進めたが、コロナ禍による体育大会の中止校もあり、混乱した状況も見られた。

本年度の実施状況アンケートでは、えびの市内教職員の約80%が活用できていることが分かった。「活用が難しかった」との回答も寄せられたが、研究センターの見解として、学級担任の裁量部分があり、記入できなかった事実とそれに変わる感想や意見をファイルすることで、本年度の内容をカバーすることができるとして、先生方に呼びかけた。また、資料14にあるように、「保護者からの一言があり、全員の対応が難しい」や「持ち帰らせることで紛失することがある」との回答も寄せられた。これに対しては、データで存在するえびの市キャリアパスポートを、編集可能な状態で各校担当へ送付し、児童生徒、学級の実態や現状に合わせて改善し、今後の活用を促すことができるようにした。（資料15）

改善

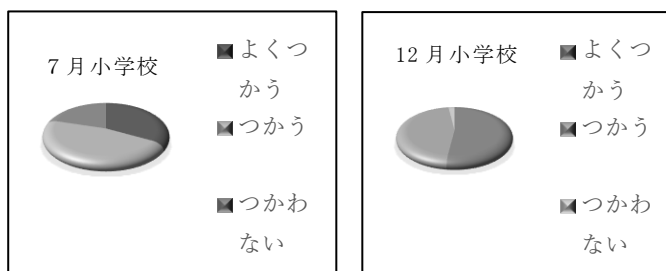
【資料14 保護者からの一言欄】 【資料15 改善後のキャリアパスポート】

4 研究の考察

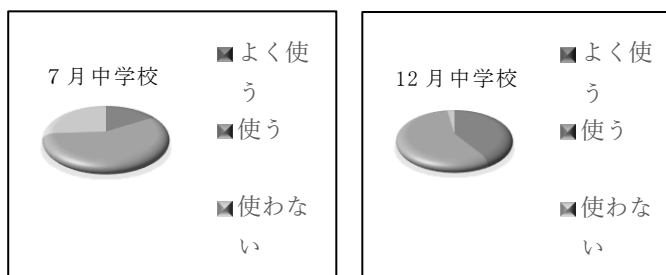
(1) ロイロノート授業活用の変遷

ロイロノートの活用が児童生徒の主体的な学びをサポートする状況が見えてきた中、授業への活用状況を調査し比較した。その結果、資料16・17に見られるように、市内小中学校では、ロイロノートの授業へ導入が進んできたことが伺えた。

今後、ロイロノートの積極的な活用に伴い、情報活用能力の育成への研究を進め、情報化への対応を図る必要がある。



【資料16 ロイロノート活用状況変遷（小学校）】



【資料17 ロイロノート活用状況変遷（中学校）】

(2) 研究の成果と課題

- ICT活用により、従来の学びを主体的な学びへと変える取組ができた。
- キャリアパスポートを作成することで、取組や考え方の共有を図ることができた。
- 情報活用能力の育成について小中一貫で研究していく必要がある。
- キャリアパスポートの活用を、小中一貫で継続していく必要がある。

5 参考文献

小学校学習指導要領 文部科学省 2017年告示

中学校学習指導要領 文部科学省 2017年告示

学びのイノベーション事業実践報告書 文部科学省 2020年

研究同人

【令和元年度教育研究センター】	【令和2年度教育研究センター】	【令和3年度教育研究センター】
所長 萩原 和範 永山 新一（教育長）	所長 永山 新一（教育長）	所長 永山 新一（教育長）
事務局 川越 広幸（主幹）	事務局 川越 広幸（主幹）	事務局 川口 直（主幹）
事務局 長友 淳（指導主事）	事務局 長友 淳（指導主事）	事務局 平田 智希（指導主事）
座長 渡邊 政彦（岡元小教頭）	座長 吉野 達三（岡元小教頭）	座長 吉野 達三（岡元小教頭）
研究員 高須 翔太（飯野小）	研究員 松田 一穂（飯野小）	研究員 松田 一穂（飯野小）
研究員 永田 光遵（上江小）	研究員 永田 光遵（上江小）	研究員 高田 峻輔（上江小）
研究員 上森 千穂（加久藤小）	研究員 中村 雄三（加久藤小）	研究員 島塚 美緒（加久藤小）
研究員 本田 昭寿（真幸小）	研究員 本田 昭寿（真幸小）	研究員 押川 博重（真幸小）
研究員 川島 秀幸（飯野中）	研究員 川島 秀幸（飯野中）	研究員 川島 秀幸（飯野中）
研究員 海野 敏樹（上江中）	研究員 松田 裕子（上江中）	研究員 馬場 公子（上江中）
研究員 門田 直樹（加久藤中）	研究員 門田 直樹（加久藤中）	研究員 門田 直樹（加久藤中）
研究員 今坂 理恵（真幸中）	研究員 今坂 理恵（真幸中）	研究員 今坂 理恵（真幸中）